日蓮主義宣伝映画について
――立正活映資料および『鍋かぶり日親』を中心に

ユリア，ブレニナ
上田　学

はじめに

本稿は、早稲田大学演劇博物館（以下、演博と略）が所蔵する立正活映資料を紹介するとともに、その独立プロダクションの映画史的、宗教史的な意義を検討することを目的としている。立正活映は、後述するように、日蓮主義の布教を目的として、牧野省三が日活から独立して設立した牧野教育映画と共同で、大正末期から昭和初期にかけて、四本の宗教映画を製作した独立プロダクションである。

牧野省三と宗教の関係については、いくつかの先行研究が存在する。牧野省三が日活から独立し、牧野教育映画製作所を設立した際、資金に窮して仏教諸派の後援で、宗教映画を製作したことは、これまでも映画人の証言などでたびたび記述されてきた[1]。また島田裕巳は、省三の没後であるが、天理教が後援した『大聖天理御教祖』（金森万象監督、内藤プロダクション、1931年）について論じ、マキノ智子が中山みきを演じたことに言及した[2]。中川剛は、浄土真宗の僧侶、沼法量がシナリオを書いた『信の力』（牧野省三監督、牧野教育映画、1922年）や『毛綱』（吉野二郎監督、マキノプロダクション、1928年）の製作の経緯について明らかにした[3]。高木博志は、牧野省三と尾上松之助の出会いが金光教の参詣を介したことについて、松之助の育った中島遊郭との関連を論じた[4]。児山陽子は、牧野省三と金光教、『金光教祖伝』（人見吉之助監督、ニッポンフィルム、1933年）とマキノプロダクション解散の関係を明らかにした[5]。さらに映画作品そのものについて、近年、伊予津島仏教映画宣伝部と牧野教育映画が共同で製作した『稲田の草庵』（沼田紅緑監督、1922年）、浄土真宗に関連する『肉付の面』（牧野教育映画、1922年）のプリントが、それぞれ発見され、東京国立近代美術館フィルムセンター（現在の国立映画アーカイブ）での公開を通じて、あらためて牧野教育映画とそれを支援した宗教への関心を集めた[6]。

しかし立正活映については、いずれの先行研究も言及しておらず、その存在は知られてこなかった[7]。そのような状況で、立正活映が、牧野教育映画に依頼して製作した『鍋かぶり日親』（牧野省三・沼田紅緑監督、1922年）の冒頭2巻分に該当するプリントが発見され、2018年に神戸映画資料館で公開された。立正活映資料の概要は次節で述べるが、演博の資料群は、新たに発見されたプリントの価値をあらためて定義するとともに、これまで前景化されてこなかった日本映画と宗教の関係、とりわけ日本近代史に大きな役割を果たした日蓮主義との結びつきを示す点に、その重要性が表れているといえるだろう。

日本映画史において、映画会社が宗教団体から委託されて宗教映画を製作するのは、牧野教育映画が初めてではなく、出張撮影自体は明治期の吉澤商店のカタログなどにもみられるものである[8]。映画を積極的に布教に導入した教派神道についても、前述の島田や高木、児山のほか、ナンシー・K・ストーカーによる大本教の研究などが知られている[9]。それでも立正活映資料が重要なのは、日蓮主義という、明治後期から昭和初期にかけて大きな影響力をもった仏教思想と、映画史との関係を解き明かす導きの糸となる可能性をもっているからである。なお本稿は、「はじめに」と第一節を映画史の立場から上田が、第二節から「おわりに」までを宗教史の立場からブレニナが執筆した。

1．立正活映資料と『鍋かぶり日親』

演博が所蔵する立正活映資料は、2017年に古書店から購入したノンフィルム資料であり、そこに含まれる資料群は、主に六種類に分類される。その詳細は、早稲田大学演劇博物館演劇映像学連携研究拠点から2020年に刊行予定の目録に所収されるため、ここではその全体像を述べるにとどめたい。

六種類の資料群のうち、第一は『鍋かぶり日親』に関するものであり、撮影台本、書簡等の製作資料、検閲用梗概、チラシ、ポスター、新聞記事、スチル写真等の興行資料が含まれている（立正活映資料46357-01〜24）。第二は『楞厳丸（りょうごんまる）』（後藤秋声監督、1924年）に関するものであり、シナリオ、撮影台本等の製作資料、チラシ、ポスター、新聞記事等の興行資料がそこに含まれる（立正活映資料46356-01〜16）。第三は『加藤清正公御一代記』（牧野省三・沼田紅緑監督、1927年）に関するものであり、シナリオ、製作メモ等の製作資料、新聞記事等の興行資料が含まれている（立正活映資料46386-01〜12）。ここまでが、立正活映が実際に製作した、三本の宗教映画の関連資料である[10]。さらに第四は、実際には製作されなかった映画『日蓮』に関するものであり、公募シナリオ、書簡等が含まれる（立正活映資料46358-01〜29）。特に重要と思われるのは、まだ脚本家として駆け出しであった比佐芳武の不採用シナリオ（立正活映資料46358-06）と、映画化を後援する「日蓮門下統合会」の名簿であり、後者については第６節であらためて述べるとともに、論末に参考資料としてまとめた（立正活映資料46358-08）。第五は、立正活映の社主、妹尾朔が、映画界に参入する以前に考案した「統一節」に関するものであり、これが立正活映の興行を準備した経緯は、第４節で後述される（立正活映資料46371-01〜05）。第六は、「本化御門下各教団緇素大会速記録」と題された、1930年開催の日蓮宗の僧俗集会に関する二冊の速記録である（立正活映資料46355-01〜02）。

これらの資料群のなかから、本節では『鍋かぶり日親』に関する資料にもとづき、考察を進めたい。前節で言及したように、『鍋かぶり日親』については、近年、映画の序盤に該当するプリントが発見された。『鍋かぶり日親』の製作に関する背景と経緯は、第５節で後述することとし、ここでは現存するプリントに関連する事項を論じていく。当該プリントは9.5mm であり、公刊されたシナリオ、妹尾朔『鍋かぶり日親』（日蓮主義宣伝活動

写真、1923年、立正活映資料46357-02）のテキストを参照すれば、全十二巻のうちで最初の二巻分である。第一巻に相当する部分が2018年に神戸映画資料館で公開され、第二巻に相当する部分が2019年に同館で公開を予定している。

立正活映資料をもとに、この映画のオリジナルについて考察したい。当該資料に含まれるスチル写真は12種であり（立正活映資料46357-17・23）、そのうちで現存プリントと同一のシーンと判断されるのは３種である。また、立正活映資料に含まれる撮影台本（立正活映資料46357-01）は、公刊のシナリオと同じ十二巻分のテキストが作成されている。ただし、同資料のチラシについては、「全十巻　一万呎」と明示されており、異同がみられる。現存プリントは伴野文三郎商店のパテ・ベビー9.5mm であり、一般販売用のため、これ自体は二巻で完結していたと思われる[11]が、これらの点を総合すれば、現存する二巻分以外にも後続巻の撮影がおこなわれ、それらが失われたことが推察できる。

続いて、『鍋かぶり日親』の監督についても考察したい。公刊されたシナリオには「牧野省三氏監督」と記載されており、撮影台本に記述されたクレジットも、「脚色者／牧野教育映画製作所／所長／牧野省三氏」となっている。さらに現存プリントのクレジットは、「監督・・牧野省三」となっている。ただし、御園京平は監督を沼田紅緑としており[12]、当時の製作体制を考えれば、実質的な監督は沼田が担ったと考えるのが自然である。ここで注意したいのが、『鍋かぶり日親』の十巻ないし十二巻というのは、牧野教育映画が製作した作品では異例の長さだったという点である。御園の調査にもとづけば、ミカド商会および牧野教育映画、マキノ映画の作品で、それに匹敵するのは大活と提携した『実録忠臣蔵』（牧野省三監督、1922年）の十三巻と、『仮名手本忠臣蔵』（同、1923年）の十五巻のみで、あとは八巻以下の作品しかない。その後の東亜マキノで澤田正二郎を主演に迎えた『月形半平太』（衣笠貞之助監督、1925年）や、マキノプロダクションの御室撮影所で聯合映画藝術家協会と提携した『日輪』（同）、独立直後の阪東妻三郎主演の『雄呂血』（二川文太郎監督、阪東妻三郎プロダクション、同年）などに匹敵する大作が、『鍋かぶり日親』であり、このため公的には牧野省三を監督としてクレジットしたものと推察される。

最後に、『鍋かぶり日親』が公開された空間について、述べていきたい。『鍋かぶり日親』の上映について、チラシ（立正活映資料46357-04）から把握できるのは12地点14回である（表）。立正活映資料中のチラシにもとづけば、巡回映写は京都の岡崎（京都市）公会堂からはじまり、関東と関西を往復しながら、九州まで進出していたことが理解されるだろう。各地の寺院の協力を得つつ、信徒を動員した巡回映写は、かなりの観客数を集めたことがうかがえる。

このような資料の位置づけを踏まえ、次節からは宗教史の観点から、あらためて立正活映について論じていきたい。

表　立正活映資料チラシにみる『鍋かぶり日親』の巡回映写

公開日	映画館	地域	期間
1922年 6 月 2 日	岡崎公会堂	京都	1 日間
6 月 3 日	舞鶴座	舞鶴	3 日間
6 月 3 日	日宗寺	舞鶴	3 日間
7 月25日	中央仏教会館	神田	3 日間
10月14日	十六会館	伏見	1 日間
11月 1 日	明治座	栃木	2 日間
11月 6 日	中央仏教会館	神田	5 日間
11月19日	共益倶楽部	神戸	3 日間
12月 6 日	横浜記念会館	横浜	2 日間
12月15日	旭座	中津	2 日間
1923年 3 月15日	有声館	八王子	4 日間
5 月 2 日	博多座	福岡	6 日間
5 月13日	川口座	柳川	2 日間
5 月28日	南真経寺	向日	2 日間

※立正活映資料 NRK46357-04にもとづき作成。

2．牧野省三と妹尾朔

1919年に「日本映画の父」と称される牧野省三（1878－1929）はミカド商会を結成し、その事務所を自宅に置く[13]。その後、ミカド商会は一旦日活へ合併するが、1921年に完全に独立を果たした牧野は、京都洛西の禅寺、等持院の境内で牧野教育映画製作所を設立し、意欲的に教育映画の製作に取り組んでいく。しかし、予算が乏しく配給面でも行き詰まり、経営はすぐに厳しくなる。

そこで、牧野は解決策として経営の多角化に乗り出し、映写機の製造と販売を行い、販売先として学校や寺院に教育映画を貸し付けることを思いつく。それに加えて、積極的に官公庁や寺院の依頼を受けて宣伝映画を作ることによって、経営を立て直そうとする[14]。なかでも仏教教団から依頼され、製作した宗教映画が多い。それは、中川剛が指摘するように、経済的に安定した顧客を求めた牧野と、宣伝映画を布教活動に役立たせようとした教団側の、双方の思惑が合致したためである[15]。

例えば、浄土真宗大谷派は、立教開宗七百年記念を1923年に設定し、1921年ころからその一環として映画を布教の手段として活用しはじめる[16]。真宗寺院を顧客に想定して作られた『大親鸞』（模範活動写真、1922年）は、親鸞ブームと相まって連日盛況で宗教映画の可能性を示すひとつの転機となる[17]。牧野省三も浄土真宗の委嘱で1922年の一年間だけで少なくとも六本の映画を製作している[18]。省三の長男、マキノ雅弘（1908－1993）が

「一番大きなスポンサーは本願寺だった」[19]と述懐しているのにも頷ける。また、同年に知恩院や高野山の依頼で浄土宗と真言宗のために、それぞれ『開宗のあと』（牧野教育映画、1922年）と『弘法大師御伝記』（同）も製作している[20]。もともと真言宗寺院の巡回布教用に製作された『弘法大師御伝記』は、1924年10月31日に浅草第一館で封切られ、一般向けに公開されることとなる。

こうしたなか、日蓮門下からも牧野教育映画製作所への働きかけがあり、本稿で取り上げる『鍋かぶり日親』が製作され、1922年７月に一般に公開される。しかし、浄土真宗や浄土宗、あるいは、真言宗の宗門とは違い、この映画の製作を依頼したのは、寺院ではない。すなわち、日蓮宗の在家信者が1921年に設立した日蓮主義宣伝活動写真株式会社がその依頼主となる。この会社はのちに立正活映株式会社（以下、立正活映と略）に社名を改め、牧野と共同で『鍋かぶり日親』のほか、『楞厳丸』と『加藤清正公御一代記』を製作している。日蓮宗史の傑僧や強盛な信仰者を主人公にしたこの三本の映画は、全て同社社長の妹尾朔（1880－？）[21]の脚本で製作されたものである。

ここで、妹尾朔の経歴と映画会社を興した経緯を紹介しておきたい。なお、管見の限り、妹尾に関する先行研究や彼自身が自分について書いた資料が皆無に等しいため、本稿では、妹尾の弟子の一人であり、生涯彼とともに活動した小島愛之助（1884－1973）の伝記[22]をもとに議論を進めていく。また、妹尾のプロダクションと映画興行については、演博の所蔵するノンフィルムの立正活映資料を中心として考察を加える。

３．統一節講演のネットワーク

妹尾朔（はじめ）は1880年に岡山県久米郡柵原町吉ヶ原で熱心な法華信者の家で生まれた。岡山の弁護士の家に書生として住み込みで働いたのち、東京帝国大学に入学し、1906年に文学部哲学科専科を卒業。東大時代の親友にはのちに岩波書店を開業した岩波茂雄（1881－1946）がおり、生涯親しくしていたという[23]。在学中は、のちに妹尾の後援者のひとりとなる顕本法華宗の僧侶で日蓮主義の提唱者のひとり、本多日生（にっしょう）（1867－1931、以下、日生と略）の講演を聞き、キリスト教の立場から論争したというエピソードがあるほど、一時期はキリスト教に傾倒する。妹尾は熱心に哲学や宗教を研究したが、日蓮信仰にめざめた経緯は不明である。卒業後は萬朝報に入社し、しばらく若い知識人の読者を相手に執筆に没頭するも、1909年には京都に移り、京都慈善救護院と京都慈善新報社という福祉事業を始める。同じころ日蓮の伝記を創作し、日蓮主義鼓吹のために「統一節（とういつぶし）」を発表し、宇都宮主計之介（うつのみやかずえのすけ）という芸名でその布教活動をスタートする。妹尾が鼓吹した日蓮主義とは、そして、統一節とはどのようなものだったであろうか。

日蓮主義とは、鎌倉時代の僧侶である日蓮（1222－1282）の伝統的な教えを、近代的に再解釈した、近代仏教思想のひとつである。国家主義や社会主義などの何々主義という言葉が流行したころ、田中智学（1861－1939、以下、智学と略）が造語したものである。智学は、日蓮とその思想を宗門や寺院の中に閉じ込めるべきではないと考え、社会生活の上

に広く活動する原理（すなわち主義）として、日蓮主義を提唱したが、とくに1910年代から1920年代にかけて、日本社会において日蓮主義が流行することとなる[24]。例えば、1920年は、宮沢賢治（1896－1933）と石原莞爾（1889－1949）が、国柱会という智学が創設した在家の宗教団体に入会した年であり、以後、両人はそれぞれの立場で日蓮主義者として活躍していく。

他方、統一節とは、語り物の一種で、日蓮の生涯の事績をわかりやすい文章に綴り、これに節をつけて講演するものである。妹尾はこの統一節を案出する際に浪花節や義太夫、浄瑠璃などの日本の様々な物語芸能を統合したという[25]。とりわけ桃中軒雲右衛門（とうちゅうけんくもえもん）（1873－1916）が流行をもたらした浪花節は、妹尾にとって大きなヒントとなったと推測できる。浪花節は、明治後期から昭和前期にかけてもっともポピュラーな大衆芸能であり、娯楽として大流行した[26]。そのブームの立役者だった雲右衛門の動きを妹尾が意識したのは間違いない。例えば、妹尾は大阪や京都で統一節の大々的な劇場興行を開催し、活動の資金源にしようとしたことがある。それは、寄席から劇場への浪花節の口演空間の拡張に成功した雲右衛門[27]と同じ路線を進もうとしたことを物語る。しかし、妹尾の目論んだ劇場進出は不成功に終わる。

1910年２月14日、京都新京極の聚楽亭において妹尾が統一節を初めて大衆の前で発表する。そして、1912年には日蓮の伝記を『日蓮聖人御伝』として刊行する。同年８月31日に妹尾が統一節の講演を篠山の高砂屋旅館で行なっていた時、その場にいた小島愛之助が感動して妹尾に弟子入りする。小島は妹尾の統一節講演を通して日蓮の姿に理想像を発見し、生涯を日蓮主義鼓吹に捧げることを決心したという。一番弟子となった小島は、妹尾から宇都宮太郎という芸名をもらい、講演を聴いた信者には太郎先生と呼ばれ、全国各地で講演活動を行なっていく。

妹尾は1913年まで346回の講演をこなし、弟子も増え、「本化芸術布教団」（のちに日宗芸術布教団に改名）を組織し、東京浅草にあった統一閣に本部を置く。統一閣は、先述した日蓮主義の提唱者のひとりである日生が開堂した布教道場である。ちなみに、雲右衛門とその妻のおはまの墓も、日生が住職をつとめた品川の天妙国寺にある。また、彼が創設した統一団という僧俗の日蓮主義団体は、芸術布教に対して強い関心を持ち、謡曲、講談、落語、浪花節や統一節、そして、後述するように、映画布教にも積極的だった[28]。

ともあれ、1914年に小島が妹尾の許しを得て単独の巡講を始め、全国各地はもとより、朝鮮や満州、樺太まで広く統一節の講演布教を行なっていく。1948年まで31年間にわたって講演活動を続け、897ヶ所で講演し、聴衆は20万人以上に達したとされる[29]。妹尾と小島が巡講したのは、主に日蓮宗寺院や日蓮主義団体の活動拠点だったが、例えば千葉県での講演の会場には砲兵連隊将校集会所や小学校、製紙工場などもあった[30]。とくに全国各地の寺院の協力が不可欠だったが、1914年に山梨県下の寺院において偽統一節の演者が現れ、寺院を騙して姿をくらました例があったため、寺院での講演実施の協力を得るのに苦労したという。とはいえ、立正活映設立後は、統一節の巡講のネットワークが巡回映写のために活用され、いわば映画の配給網となっていく。

1915年ごろ、妹尾は体調を崩し、東京で引退講演をすることに決め、東京品川の妙国寺（現・天妙国寺）や日蓮宗大学（現・立正大学）、統一閣、池上の理境院などで最後に統一節を披露する。妹尾はある程度の興行成績を見込んでいたが、経済的には失敗に終わったという[31]。こうした失敗もあってか、1916年５月には「統一節後援会」が成立し、「日蓮聖人の主義及び人格を宣伝する」「芸術布教の一法」として統一節を後押しすると表明。後援会のメンバーには、日生をはじめ、野口日主（顕本法華宗、1866－1931）、加藤文雄（日蓮宗、1888－1934）、酒井日慎（日蓮宗、1855－1944）、清水梁山（日蓮宗、唯一仏教団、1864－1928）、佐藤鉄太郎（海軍大佐、1866－1942）、矢野茂（大審院検事、？－1935）など、当時はよく知られた日蓮宗各派の僧侶や日蓮主義者の名前がみられる[32]。引退した妹尾は、彼自身が吹き込んだ「蓄音機音講」の商売を始め、その広告に力を入れる[33]。

一方、講演活動を続けた小島は、1918年に結婚し、巡講で留守中の妻の生活を安定させるために副業として民間医療機器の販売や宇治茶の通信販売を開始。また、1920年９月12日には旅館を開業する。「法華経につながる人たちが共に楽しむところ（部）」という意味を込めて「法華倶楽部」という旅館名にしたと小島はその名の由来を説明した[34]。実は、開業のきっかけは、小島が統一節を語りながら全国を巡っていた際、多くの日蓮宗信者から京都にある本山寺院に参拝したいが安心して泊まれる場所がないという悩みを聞いたことである。小島によれば、当時は京都に限らず、東京や大阪、横浜などの大都市の国鉄駅前は浮浪者がたむろし、駅前に悪質な客引きが旅行者を騙していたとされる。そこで、旅館経営を決意した小島は、開業の資金を調達するべく、統一節巡講のネットワークを活用し、日蓮宗寺院や信者から出資者を募ることにした。1921年１月には、法華倶楽部は、智学の国柱会からの要請で出張特約店、いわば会社契約の第一号となる[35]。こうしてできた「日蓮主義旅館」[36]法華倶楽部は、1927年に京都で新館を開業し、1931年には東京に進出して上野駅の近くで開業した。現在は、ビジネスホテル、法華クラブとしてよく知られている。

４．映画製作会社の設立の背景――記念行事と日蓮宗の動向

さて、小島の活躍を応援しつつ、映画の人気を布教に活用しようと思った妹尾は、1921年に日蓮主義宣伝活動写真株式会社を設立する。同年に株主募集の広告[37]を出し、発起人及び賛成者のリストには妹尾や小島はもとより、日生や野口日主のような僧侶や、のちに立正活映の専務取締役となる杉山喜八[38]など、149名の名前がみえる。資本金総額は金10万円、総株数は2000株、うち693株は発起人と賛成者によって引受済みであるので実際の募集株数は1307株、申込証拠金は５円[39]、創立事務所の住所や電話は妹尾の自宅のものとなっている[40]。

同年８月には、「日蓮主義映画劇脚本募集」の広告を出し、「日蓮主義体験者のフィルムを映写する目的」で日親という室町時代の日蓮宗僧侶についての脚本を募集する[41]。募集の結果は不明だが、おそらく満足のいくものがなく、妹尾自身が脚本を手がけることとなっ

たであろう。そして、その脚本をもとに牧野と共同で『鍋かぶり日親』を製作することになる。『朝日新聞』が「主義宣伝の映画」の製作に注目し、その「映画界」欄は、「日蓮主義宣伝［活動写真一筆者注］株式会社と銀行会社要録には珍しい会社で主義宣伝の面白い映画を製作中だとか」と伝えている[42]。

ここで、妹尾が映画製作に乗り出した時代背景、とりわけ日蓮宗門と映画布教について触れておきたい。

まず、1921年は日蓮降誕700年を記念する年だったこと、そして、1931年は日蓮が寂して650年がたつ、いわゆる650遠忌（おんき）（50年ごとに遺徳を追慕する報恩の法会）を迎える年だったことが大きく関係していると言わなければならない。つまり、1921年から1931年にかけて、およびその前後の時期に、日蓮宗門内外は、関連する記念行事で盛り上がり、日蓮の生涯を描いた伝記の出版、歌舞伎や劇の上演、さらには映画の製作と興行が盛んに行われたという背景がある。妹尾が映画会社を設立し、三本の長編映画の製作と巡回映写を行ったのは、まさにその時期と重なる。また、後述するように、上映には至らなかったが、1938年11月上旬に全国一斉封切りを予定していたオールトーキー『日蓮』も、もともとは650遠忌を記念するための妹尾脚本、日活製作の伝記映画である。

次に、具体的な日蓮宗の動向をみていこう。日蓮宗は、冒頭で触れた浄土真宗や真言宗などの教団委嘱の映画製作、また、キリスト教や大本教による映画布教の動きを意識しつつ、日蓮の伝記映画をもって布教する活動を積極的に行った[43]。もともと江戸時代には日蓮の生涯を扱った伝記が数多く刊行され、日蓮を主人公とする浄瑠璃や歌舞伎、謡曲など人気を博したこともあり、近代に入ってからは日蓮についての映画が次々と作られていき、布教の手段として活用されていく。また、日蓮の伝記は劇的であり、日親や加藤清正のように、日蓮以後の僧侶や歴史的人物の中にも熱烈な信仰者が多く、映画化しやすいだけでなく、布教伝道の材料にも最適であるという側面もある。

それに目をつけた山梨県の日蓮宗の青年僧は、日蓮宗青年活動写真布教隊を結成[44]し、尾上松之助主演の『日蓮上人一代記』（小林弥六監督、日活、1918年）などを購入し、1920年９月12日に発会式を兼ねて身延山で初上映を行なった。以後、山梨、長野、静岡、愛知、東京、京都、四国、九州、東北、北陸を巡回布教した。当時の映画の人気と相まって各地ともに熱狂的な好評を博し、記録では、1921年までの上映回数は125回で、16万4900人以上の観客数を得たという。1922－23年には、身延山から派遣された講師が青年僧の布教隊と協力して各地で映画を使った布教活動に積極的に取り組み、1924年には再び全国を巡り、中国の青島まで布教した。上映に当たっては必ず講演による教義の宣伝を行ってから、映画と弁士の説明を通して日蓮の事績を感動的に語るという布教スタイルであった。

また、日蓮宗宗務院の教学部にも映画布教班が組織され、さらには、社会課が設けられると免囚保護や幼児教育などの一般の社会事業においても映画布教に重点が置かれるようになる。伊藤海聞（日定、1892－1964）[45]のように、映写技師の試験を受けて免状を取り、弁士もしながら一人二役で活動した僧侶もいれば、高佐貫長（日煌、1896－1966）[46]のよ

うに、ハリウッドから映画の技術を持って帰国した栗原トーマス（喜三郎、1885－1926）に師事し、1924年に釜山で朝鮮キネマ株式会社を設立した僧侶もいる。伊藤はポータブル映写機（デブライ）と、買い込んだフィルムを持って、東北や北陸などの各地を歩いて巡回布教を行った。法華倶楽部を設立したあと、その経営を妻に任せ、映写機を担いで全国を巡った小島に通ずるものがある。一方、高佐は、釜山の財界や文化人の協力を得て、朝鮮初の映画会社である朝鮮キネマの撮影所長となり[47]、映画製作や巡回映写を行った。同年11月に高佐の脚本・監督の映画『海の秘曲』（日活・朝鮮キネマ、1924年）を、東京浅草の三友館で封切った。1926年には、日本統治時代の朝鮮映画の代表作とされる『アリラン』（羅雲奎監督、朝鮮キネマ）を製作するが、他の作品は成功せず、1927年に倒産する。

他方、日本国内では、1927年６月には山梨県甲府市の若松町信立寺内に日宗映画宣伝協会、12月には伊勢町遠光寺に日蓮主義映画協会ができ、ともに映画の貸付や映画布教の申し込みを受けた。映画布教が盛り上がった、650遠忌を記念する1931年前後の時期に、日蓮宗宗務院では、社会課の映画班を強化し、立正活映の『楞厳丸』や小笠原プロダクションの『久遠の響き』（栗原トーマス監督、1924年）などをもって全国各地からの要望に応えて映画布教を行う。また、1931年に日本橋の身延別院内に中央立正映画協会が設立されたことによって、伊藤海聞などの僧侶の布教活動がさらに活発化する。記念行事のハイライトとなった650遠忌法要も実写映画に撮影され、全国で公開され、日蓮宗においては映画布教が最高潮になる。しかし、1933年以降、日本精神や日本主義を説く論調が激化するなかで、日蓮遺文に「不敬」な字句があることや、その曼荼羅も「不敬」であることを槍玉に挙げるなどして、日蓮門下への攻撃が始まり、日蓮主義宣伝を行うのが難しくなっていく。日蓮主義者の大々的な後援にも関わらず、実現できなかった映画『日蓮』も、こうした事態と無関係ではないだろう。

とはいえ、大正期・昭和前期には、民間の商業映画も多数製作されている。早い例としては、『日蓮上人一代記』（牧野省三監督、日活、1914年）が挙げられるほか、大正期には、『日蓮上人』（吉野二郎監督、天活、1917年）、先述の『日蓮上人一代記』、『日蓮上人龍ノ口法難』（吉野二郎監督、国活、1920年）、『日蓮記』（中川紫郎監督、帝国キネマ演芸、1922年）、『日蓮小町』（賀古残夢監督、松竹キネマ、1924年）、そして、昭和期に入ってからは、『国聖大日蓮』（古海卓二監督、古海卓二プロダクション、1929年）、『国柱日蓮大聖人』（中島宝三監督、大都映画、1935年）、『国を護る者 日蓮（国難を叫ぶ日蓮）』（曽根千晴監督、新興キネマ、1935年）がある。『キネマ旬報』は、古海卓二監督『国聖大日蓮』が天皇即位の記念に作られた映画であると紹介し、その興行価値は日蓮宗門が協力しているので非常に有利であり、各地にある日蓮を信奉する団体を利用すると、驚くべき成績を挙げると評価している[48]。日蓮の生涯を題材とする映画が注目を集めていたことがうかがえる。

5．『鍋かぶり日親』

さて、『鍋かぶり日親』は、1922年から1924年にかけて全国各地で上映された日蓮主義宣伝映画のひとつである。「信力は権力に勝ちました」[49]という言葉で締めくくられている点が、生涯、権力者（幕府）を激しく批判し、数度にわたる法難から生還した日親の宗教行動の本質を突いているかもしれない。ここで、日親とはどのような人物だったのかを簡単に紹介しておきたい。

日親（1407－1488）[50]は、1440年に将軍足利義教（1394－1441）に他宗の排斥や法華経のみの信仰を求めるなどして諫言したため、怒りをかってしまい、真っ赤に焼けた鉄鍋を頭に被せられたが顔色ひとつ変えずにそのまま説法したという伝説から「鍋かぶり日親」とも呼ばれる。歴史上の日親は、1407年に上総国（千葉県）の埴谷で生まれ、中山法華経寺で修行した後、九州の肥前や京都で布教し、1488年に82歳で亡くなっている。日親は、日蓮没後に宗門におこった妥協的な姿勢を批判し、正しい教え（法華経）を守る者としての自覚を持って宗教活動を展開するべきだと主張しただけでなく、幕府に対しても激しい批判を行ったため、厳しい受難の生涯を送ったとされる。

ともあれ、鍋かぶりをはじめ、日親にまつわる様々な伝承を定着させたのは、日親の一生を超人的な宗教者として描いた伝記『日親上人徳行記』である。それは、江戸時代、17世紀の半ば過ぎたころにまとめられたものであるが、日蓮に次いで数多くの伝説が語られ、日蓮の再来として信仰される下地をつくったものである。また、受難を克服する日親の生命力には、庶民の抱く現世利益の効験、例えば、歯痛や頭痛などが治るといった効き目が期待され、日親信仰がさらに広まっていく。日親信仰の中心は、ゆかりの宝物が数多く伝えられている京都本法寺であり、ここを信仰の拠点として日親の霊性が各地に伝播したとされる。現実に日蓮の足跡が及ばなかった西日本の日蓮宗信者は、待つべくしても現れない日蓮の姿を、日蓮に共通した宗教的性格を持つ日親の中に見出す。妹尾のプロダクションが日親の伝記を第一作目の主題にしたのは、こうした京都の信仰の伝統を背景にしているからであろう。

近代において日親に注目した人物のひとりが、明治期の評論家で、田中智学の『宗門之維新』（1901年）を読んで日蓮信仰者となった高山樗牛（1871－1902）である。1902年に31歳の生涯を閉じるが、その年に病床にあって『日親上人徳行記』をもとに『冠鐺日親（なべかぶりにっしん）』の短編集を著す。そこでは、樗牛が日親の法華経や日蓮に対する絶対的な信仰とその宗教行動に感激し、日親が秀吉や家康以上の英雄であると讃える。その後も日親の名前はしばしば人びとの口にのぼり、学校の教科書にも掲載され、戦後においては、「強気の布教者」というイメージが定着したようである。

本題に戻るが、『鍋かぶり日親』の興行は、まず1922年６月２日に京都市公会堂で、６日と７日の両日に大阪の中央公会堂で行われ、満員となる[51]。とりわけ京都では、村雲尼公と呼ばれ、尊敬を集めた尼僧の九条日浄（1896－1962）をはじめ、日蓮宗管長や各派の

僧侶などの観覧を得る。日蓮宗門がさっそく７月18日に妹尾に依頼し、７月25日から27日までの３日間にわたって、東京神田の中央仏教会館で封切り会を開催する。依頼状は、24名の各派を代表する日蓮宗僧侶の名前で、キリスト主義や親鸞主義ではなく、日蓮主義こそが思想の根底をなすべきことを挙げているが、明らかにキリスト教や浄土真宗の動向を意識していることがわかる。また、日親の映画は妹尾の会社の事業として傍観すべきではないことや、「大いに思想主義宣伝の一助と」すべきことを挙げ、多くの人々がこの「活教劇に接触」できるように、東京での上映を依頼すると記載されている[52]。ちなみに、興行の入場者数は、東京は不明[53]だが、京都では１日２回の上映で4771人、大阪では２日間４回の上映で5154人であり、大盛況だったという[54]。

国柱会の機関紙『天業民報』は、京都での封切り会の様子を詳しく伝えている[55]。それによると、「かねての噂に待ちかねて」いた観衆は、開会２－３時間前から公会堂の前の庭に集まり、日蓮宗の「信不信の区別なく」、「人の波」となった。まずは講師の説明があり、上映がスタートし、フィルムが進むにつれて、ある時は手に汗を握り、ある時は涙を流す。ありがたさに耐え兼ねた老母がお題目（南無妙法蓮華経）を口走る声さえ聞こえ、宗門内外を問わず、日親の「霊光」は輝く、と記者が高揚した気持ちを記している。また、統一団の機関誌『統一』も、三班に分かれた布教隊が各地で巡回映写を行なっていることや、入場が有料にもかかわらず、１回800人から1500人ほどの入場者がおり、2000人や3000人のところも少なくないと、「鍋かぶり日親映画　封切会の大盛況」と伝えている[56]。

1923年５月までの上映の報告[57]では、３府１道27県の169カ所で362回の映写に47万以上の人びとを動員し、今後九州に巡回する予定としたが、その３ヶ月後、1923年８月に発表された上映成績[58]によると、３府１道33県で434回の映写で56万人以上の観覧者と5359円88銭の収益を得たという。宗教映画にしては意外に成功したと言えるのではないだろうか。

では、これほど多くの人々がどのように動員されたのか、その要因について考えてみたい。製作当時、観客動員は間違いなしと思われていたので、すでに述べたように妹尾は映画の地方上映のために三班の布教隊をつくり、1922年６月１日から各地へ派遣したのである。しかし、小島愛之助によると、最初は営業がうまくいかず、６月に行われた京都や大阪での『鍋かぶり日親』の上映は盛り上がりを見せたが、７月下旬に新潟県湯沢や東京で上映され、単発の興行で終わっている[59]。これではせっかくの映画が活かされないと危惧した小島は、映画売り込みに奔走することとなる。

小島は開業したばかりの旅館を妻に任せ、映画の売り込みに専念し、自ら映写機とフィルムを運んで全国を回っていく。売り込み先は、統一節巡講のネットワークを活用した。小島の最初の目標は1923年５月末までに396回の映写予約を獲得することだったが、1922年８月25日に出発し、各地をくまなく歩き、巡講で縁のあった寺院や知人を訪ねる。小島はこうした営業を1925年３月まで続けているが、目標の396回を大幅に上回る予約をとる。営業の方法が計画的であったことは興行の成功の大きな要因である。小島は、まず出発するときに訪問先に手紙で要件を知らせ、会えないときは家人に都合を聞き、その夜か翌日早朝に訪ねる。もし予約を渋ったら、その寺院の檀家総代の家に行き、説得し、何人かの

総代の合意を得て、上映の許可をもらう。そして、旅行中に必ずお礼の手紙を送る。

つまり、宗教映画であるにもかかわらず、『鍋かぶり日親』は、いわば優れた広報担当者の小島のおかげで、56万人以上の観客数を動員することができた。『鍋かぶり日親』の次に巡業した『楞厳丸』と『加藤清正公御一代記』も[60]、確実な配給網として、妹尾と小島の統一節巡講のネットワークを有効に活用したのであるが、とりわけ小島なしではその興行的な成功は望めなかっただろう。

6．実現しなかった映画『日蓮』

1928年に立正活映から「日蓮聖人御正伝」のシナリオの募集が出る[61]。すでに触れた1931年の日蓮の650遠忌を機会として、「日蓮聖人の御正伝映画」を「宗宝として後代に伝うべき」「祖伝映画」の製作を決定したことや、「一会社の私作物に非ざる本化御門下総がかりの公作映画」という点で脚本を公募していると掲載。20巻の長編映画で、撮影費は金10万円、内容は「御正伝にして而も劇的であり興行価値の豊なもの」、応募締め切りは1928年10月末日、予選者は立正活映役員、決選者は本化各教団長、入選のもの一編だけに1000円を贈呈するという条件を提示している。

翌年の1929年に審査結果が発表される[62]。多くの脚本が集まったが、審査の結果、シナリオとして使える理想的なものがなく、久坂春助、神保邦一、安藤乾幽、大多和てい、飯野興作などの作品が選外佳作として発表。「時代の要求として、是非試みたい計画だけれど、それが現実はなかなか困難事である」と、計画は早くも行き詰る。しかし、1931年に迎える650遠忌の記念に日蓮の伝記映画を完成させたかった妹尾は、1930年６月27－28日の２日間にわたって、日蓮門下の大会を開催する[63]。おそらく、この時の話し合いを反映し、公募で得られなかった理想的な脚本を自分で手がけることにしたと考えられる。

そして、妹尾の脚本が完成し、映画化への道筋が見えはじめ、1934年６月には、「日蓮聖人御正伝映画完成近し」というニュースが『日蓮主義』の「宗門時報」欄に載る[64]。記事によると、「立正活映株式会社では昭和３年来あしかけ７年間に亘つて宗祖御正伝映画の謹作に不断の努力を続けて此程漸く完成の域に達したから遠からずして心血を注げる名画に接する事が出来るであらう」。詳細は不明だが、映画化に向けて準備がある程度は進んでいたのではないだろうか。とはいえ、完成に近いはずの映画の主演の推薦が、1935年３月17日に行われたことからすると、やはり製作は紆余曲折を経ていたと考えられる。同日、妹尾が日蓮宗各派の管長を東京学士会館に招待し、主演として市川小文治（1893－1976）を推薦した[65]。市川は『加藤清正公御一代記』の主演をつとめたこともあり、マキノプロダクションに在籍した時期もある。妹尾にとっては旧知の仲間だったであろう。製作は日活、監督は稲垣浩が予定されていた[66]。

結局、妹尾脚本の『日蓮』が映画化に至ったかどうかは不明だが、上映されなかったことは確かである。しかし、立正活映資料には、陸軍大臣の板垣征四郎（1885－1948）宛の請願書が残っており、日活の京都撮影所長の藤田平二を代表請願者とし、1938年６月に

「日本精神高揚映画」として上映の許可を求める文面から、映画の計画が上映に向けて進んでいたことがわかる[67]。

また、同じく1938年６月付の末状によると、オールトーキー映画『日蓮』の全国一斉封切りは同年11月上旬の予定であった。原作者は妹尾朔とあるが、主演は1937年に千恵プロを解散し、日活に入社したばかりの片岡千恵蔵（1903－1983）となっている。日蓮宗管長の望月日謙（1865－1943）の推奨文や内務大臣の末次信正（1880－1944）の協賛状とともに、当時の文部大臣や前司法大臣をはじめ、貴族院議員や衆議院議員の政治家、陸海軍の軍人、東京帝国大学や中央大学の教授、朝鮮総督や前京城帝国大学総長など、日蓮門下統合会の錚々たるメンバーの協賛を得ている[68]。

以上のような強力な後援陣営にもかかわらず、映画化が実現できなかったのには、様々な原因が考えられる。例えば、資金不足、あるいは、先述したように当時相次いでおこった日蓮門下に対する攻撃やいわゆる不敬事件といった時代背景などが関係していると推察できるが、今後の検討課題としたい。とはいえ、太平洋戦争のまっただ中、公開された菊池寛原作『かくて神風は吹く』（丸根賛太郎監督、大映、1944年）は、陸軍省と海軍省が後援したものである。戦争の激化に伴い、国難に立ち向かい、国を救う存在として、蒙古襲来を予言した日蓮が再びクローズアップされていくのである。

おわりに

日本社会において日蓮主義がとくに流行したのは1910年代から1920年代初頭に至るまでの時期であることはすでに述べた。本稿で取り上げた日蓮主義宣伝映画は、当時の新しいメディアとしてその流行から起用されたと考えられる。つまり、僧俗を問わず、日蓮門下は宣教手段として大いに映画を活用したことが明らかである。

ここで特筆すべきは、映画布教の前段階として、語り物である統一節の巡回講演が行われたことである。日蓮主義者は伝統的な物語芸能から新しいメディアの映画へと媒体を変えつつ、大衆への布教を進めていった。本稿では従来の研究で注目されてこなかった、こうした仏教思想の普及過程のひとつが明らかとなった。

本稿においては、立正活映を設立した妹尾朔や営業を担った小島愛之助の経歴を紹介し、その活躍を追うことで、日蓮主義と映画という新たなテーマを掘り起こしたまでである。さらなる資料の調査と考察が期待される。

謝辞　本稿の執筆にあたり、『鍋かぶり日親』の閲覧に際しまして、神戸映画資料館の安井喜雄館長、『統一』等の閲覧に際しまして、一般財団法人本多日生記念財団資料担当の西條義昌常務理事、『天業民報』等の閲覧に際しまして、宗教法人国柱会の森山真治理事にご協力いただきました。御礼申し上げます。また本稿の執筆にあたり、早稲田大学演劇映像学連携研究拠点公募研究「マルチマテリアルを基礎とした立正活映作品の復元」および神戸学院大学研究助成Ｂ「スクリーン・プラクティスに関する日亜比較文化研究」の助成を受けました。

参考資料　日蓮門下統合会会員　実現しなかった映画『日蓮』の後援者名簿

氏名	生没年	名簿に記載されている身分	備考
安達謙蔵	1864-1948	国民同盟総裁	
姉崎正治	1873-1949	東京帝国大学名誉教授	宗教学者
荒木貞夫	1877-1966	文部大臣　陸軍大将	男爵
井上一次	1873-?	陸軍中将	
井上清純	1880-1962	貴族院議員　男爵	海軍大佐
小笠原長生	1867-1958	海軍中将　子爵	宮中顧問官
岡野悌二	1870-？	（記載なし）	内外鉱業専務
笠井重治	1886-1985	衆議院議員	
河田四十一	生没年不詳	陸軍中将	
小林一郎	1876-1944	中央大学教授	法華会創立者
権藤伝次	生没年不詳	陸軍中将	
佐藤皐蔵	1871-1948	海軍中将	
佐藤正	1885-1951	衆議院議員	
佐藤鉄太郎	1866-1942	貴族院議員　海軍中将	
坂本明山	生没年不詳	（記載なし）	
四王天延孝	1879-1962	陸軍中将	衆議院議員
諏訪忠元	1870-1941	子爵	芝大神宮、芝東照宮社司
杉村勇次郎	1871-1959	陸軍少将	
鈴木荘六	1865-1940	陸軍大将	
高島平三郎	1865-1946	（記載なし）	心理学者、体育学者
頭山満	1855-1944	（記載なし）	アジア主義者、玄洋社総帥
永山武敏	1871-1938	男爵	陸軍大佐
林頼三郎	1878-1958	前司法大臣	刑法学者、検事総長、大審院長
原夫次郎	1875-1953	衆議院議員	弁護士、島根県知事
舟越楫四郎	1870-1962	海軍中将	三菱石油社長
堀内信水（文次郎）	1863-1942	陸軍中将	
本庄繁	1876-1945	陸軍大将	
本多慶子	1899-1978	（記載なし）	立正婦人会副会長、華族、松平俊子の従姉妹
牧野賤男	1875-1943	衆議院議員	弁護士
松平俊子	1890-1985	（記載なし）	立正婦人会創立者・会長、華族
溝口直亮	1878-1951	伯爵	陸軍少将、貴族院議員
南次郎	1874-1955	朝鮮総督　陸軍大将	
矢野恒太	1866-1951	（記載なし）	第一生命保険創業者、医師
山岡萬之助	1876-1968	貴族院議員　法学博士	法学者、哲学者、日本大学総長
山田三郎	1869-1965	前京城帝国大学総長	法学博士、国際私法学者、法華会創立者

京都市在俗会員			
天野治衛門	生没年不詳	（記載なし）	立正活映関係者、『鍋かぶり日親』シナリオ発行人
石田音吉	生没年不詳	（記載なし）	石田衡器製作所社長、第23代京都市会正副議長
江羅直三郎	1875-1939	（記載なし）	京都市会議員、衆議院議員
小島愛之助	1884-1973	（記載なし）	立正活映関係者、法華倶楽部創業者
下村正太郎	1883-1944	（記載なし）	大丸呉服店主、株式会社大丸会長
西村吉右衛門	1884-1944	（記載なし）	呉服商千切屋一門、史跡会会長
守山久治郎	生没年不詳	（記載なし）	留守家族同盟理事長、「全国引上運動の父」

※立正活映資料46358-08にもとづき作成。太字はこれまでの研究において日蓮信仰者・日蓮主義者として知られている者を意味する。

註

1　以下を参照のこと。桑野桃華『日本映画の父――マキノ省三伝』（牧野省三伝発行事務所、1949年）、87～89頁。マキノ雅弘『カツドウ屋一代』（栄光出版社、1968年）、104頁。岸松雄『人物・日本映画史 I』（ダヴィッド社、1970年）、30頁。

2　島田裕巳「新宗教と映画」（黒沢清・四方田犬彦・吉見俊哉・李鳳宇編『日本映画は生きている 3　観る人、作る人、掛ける人』岩波書店、2005年）、235頁。

3　中川剛「宗教映画『毛綱』の成立過程」（『同朋仏教』第50号、2014年）、39～74頁。

4　高木博志「金光教と遊郭・花街――都市布教と民衆」（『金光教学』第58号、2018年）、54～57頁。

5　児山陽子「金光教に関する芝居・幻燈・映画の上演上映について――大正期から昭和初期の『金光教徒』を中心に」（『金光教学』第58号、2018年）、162～176頁。

6　常石史子「映画史の穴を埋める66のパーツ」（『NFC ニューズレター』第62号、2005年）、2～3頁、とちぎあきら「故安部善重氏旧蔵コレクション可燃性フィルムリスト」（『NFC ニューズレター』第79号、2008年）、14頁。

7　なお立正活映資料の来歴について、以下を参照のこと。黒沢宏直「妹尾朔（1　仕入編）」（『日本古書通信』第1017号、2014年）、19頁、同「妹尾朔（2　仕込編）」（同1018号、同年）、37頁、同「妹尾朔（3　仕込編・続）」（同1019号、同年）、21頁、同「妹尾朔（4　販売編）」（同1020号、同年）、29頁。

8　たとえば、『活動写真器械同フィルム（連続写真）定価表』（吉澤商店、1910年）には、出張撮影の事例として「孤児院、育児院等の状況」が挙げられている。

9　ナンシー・K・ストーカー『出口王仁三郎――帝国の時代のカリスマ』（井上順孝・岩坂彰訳、原書房、2009年）、193～205頁。

10　立正活映資料の三本のほかに、『チビとノロマの京見物』（セノオ一葉監督、立正活映、1927年）という短編映画が製作されたようである（黒沢前掲（第1019号））、21頁。

11　福島可奈子によれば、当時の伴野文三郎商店のパテ・ベビーの目録に『鍋かぶり日親』は、第１編、第２編の二巻で掲載されている。福島可奈子「大阪毎日新聞社の映画事業をめぐる映像メディア産業の本流と傍流：寺田清四郎商店と伴野文三郎商店」（『国際文化学』第32号、2019年）、142頁。なお現存する『鍋かぶり日親』２巻目のプリントのエンドクレジットには「続／第三巻」と書かれ、また福島によれば、目録には「以下編を追ふて益々深刻味を加へゆく」の記載もみられるとのことである。

12　御園京平編『回想・マキノ映画』マキノ省三先生顕彰会、1971年、94頁。

13　滝沢一「第二部：牧野省三伝――その人と業績」（御園前掲、57頁）。

14　マキノ前掲、103～104頁。

15　中川前掲、48頁。

16　中川前掲、48～49頁。ちなみに、活動写真班による第１回の巡回は1921年12月18日、姫路布教所での布教班発会式の際、講演会とともに映写したのが始まりであるという（同、52頁）。

17　中川前掲、56～59頁。

18　『稲田の草庵』、『大和の清九郎』（牧野省三監督、1922年）、『信の力』、『肉付の面』、『佐々木高綱』（同年）、『兵士武術物語』（同年）。御園京平調査「マキノ映画全作品総目録」（御園前掲）および中川前掲、『日本映画作品大鑑３』キネマ旬報社、1960年を参照した。

19　マキノ前掲、104頁。なお、その根拠として雅弘が具体的に挙げているのは、マキノ工作所が本願寺に合計16万円相当の映写機を納入してその支払いを受けながら十数本の宗教映画を製作したことである（同）。

20　御園京平が調査してまとめた「マキノ映画全作品総目録」には、1922年から1929年にかけて製作された宗教映画が数多く挙げられている。1923年には高野山委嘱映画『貧者の一燈』（金森万象監督、牧野教育映画）、1925年には西本願寺委嘱映画『何処へ帰る』（同監督、マキノプロダクション）、1926年には東西仏教会宣伝映画『再生の微笑』（マキノプロダクション）や広島仏教伝道映画『蓮如上人御一代記』（同）、1927年には西本願寺委嘱作品『夜半の嵐』（同）、1929年には東本願寺委嘱作品『毛綱』や浄土宗総本山知恩院委嘱作品『苦悩は越ゆる』（同）が製作された（御園前掲、94～138頁）。なお、『毛綱』については中川前掲に詳しい。

21　妹尾の晩年や没年に関しては現在調査中である。1935年３月23日付けの印刷物（『日本演芸関西通信』第17号、立正活映資料46358-09）からは、同年３月17日に東京学士会館で開催された会議に日蓮宗各派の管長が集まり、妹尾は主演として市川小文治を推薦したことがわかる。また、妹尾が執筆した社内日誌は、1922年と1933年～1935年の４冊が確認されている。つまり、妹尾が没したのは、少なくとも1935年３月17日以後であると考えられる。なお、社内日誌に関しては、黒沢前掲「妹尾朔（2　仕込編）」および同「妹尾朔（3　仕込編・続）」に記載があるが、筆者は未見である。

22　小島五十人『終始一貫――法華クラブ創業への道 小島愛之助伝』（法華倶楽部、1983

年［初出1979年］)。

23　小島前掲、34頁。

24　日蓮主義の全貌については、大谷栄一『近代日本の日蓮主義運動』(法藏館、2001年)および同『日蓮主義とはなんだったのか――近代日本の思想水脈』(講談社、2019年)に詳しい。

25　例えば、当時の新聞は、妹尾の統一節が江戸小唄、薩摩浄雲、表具屋、文弥、清元、常磐津、義太夫、嘉太夫の節の粋を合わせたものであると紹介している(「著者に対する諸新聞の批評抜粋『北陸新聞』」(宇都宮主計之介講・妹尾朔著『日蓮聖人御伝』法華倶楽部、1973年［初出1912年］)、299頁を参照)。

26　兵藤裕己『〈声〉の国民国家――浪花節が創る日本近代』(講談社、2009年)。

27　真鍋昌賢『浪花節 流動する語り芸――演者と聴衆の近代』(せりか書房、2017年)、35頁。

28　映画に関して統一団の機関誌『統一』には、『日蓮上人龍ノ口法難』の広告(第329号、44頁)があるほか、「活動写真を通して民衆を教化 再建さるる統一団」(第347号、39～40頁)という興味深い記事がある。同記事によると、関東大震災の際に焼失した浅草の統一閣の再建にあたり、陸前釜石にあった大劇場(収容1700名)を東京に移し、活動写真常設場として民衆のために教育映画を上映するのは、「一般民衆を娯楽の裡に教化せしめる趣向である。活動写真は現代民衆娯楽中最も勢力あるもので、之を利用して吾等同志の使命を果たすことは頗る容易で且つ効果あるものと信じている」からであるとする。

29　小島前掲、40頁。

30　小島前掲、41頁。

31　小島前掲、93頁。

32　『法華』(第3巻5号、1916年5月)、98頁。

33　『鍋かぶり日親』の脚本の本文の後に、妹尾著『日蓮聖人御伝』の第6版とともに、妹尾が吹き込んだ統一節「龍の口夜半の太刀風」の広告がある。「法華倶楽部」の広告も掲載されているが、主幹は本名の小島愛之助ではなく、芸名の宇都宮太郎である(妹尾朔『映画　鍋かぶり日親』日蓮主義宣伝活動写真、1923年)。

34　小島前掲、195頁。

35　小島前掲、214頁。

36　妹尾前掲。

37　『統一』第312号(1921年2月)および第314号(1921年3月)。なお、「紙面都合上以下略」とあることから149人以上の賛成者を得たと思われる。

38　立正活映資料に杉山の名刺(立正活映資料46358-16)があるほか、第13回定時株主総会(1934年6月15日開催、立正活映資料46357-14)を知らせるはがきには、杉山の辞任の件が議題にあがっている。

39　立正活映資料46358-28には、藤井日将(法華宗本門流の僧侶、1878－1977)名義の株

式券がある。1925年6月4日発行のもので金150円となっている。

40　京都府紀伊郡深草村直違橋9丁目174番地。のちに、京都市諏訪町松原では仮本社、高辻通柳馬場西入泉正寺457番地では本社を置くこととなる。

41　『法華』（第8巻9号、1921年）、98頁。

42　1922年4月12日（夕刊）。ただし、「どの位面白いのか見ぬ内は同意し兼ねるがヒゲ題目や蝋燭でおどさずに見せて貰い度いものだ」という、いくらか皮肉の入ったコメントを添えている。

43　日蓮宗門による映画布教については、日蓮宗事典刊行委員会編『日蓮宗事典』（日蓮宗宗務院、1999年、復刻版、［初出1981年］）の「視聴覚布教」（860頁）および「聖伝活動布教」（867、1025頁）を参照した。

44　日蓮宗現代宗教研究所編『近代日蓮宗年表』（日蓮宗宗務院、1981年）、243頁を参照。

45　伊藤海聞については、新倉善之『池上本門寺百年史』（池上本門寺、1981年）、422～424頁を参照した。

46　高佐貫長については、孫の高佐宣長による「高佐貫長の九識論」（本化ネットワークセンター編・発行『九識説とは何か――その起源・展開と現況』本化ネットワーク叢書2、2013年）、120～124頁を参照した。

47　チョン・ジョンファ『韓国映画100年史――その誕生からグローバル展開まで』（野崎充彦・加藤知恵訳、明石書店、2017年）、33頁。

48　『キネマ旬報』（第323号、1929年3月）、120頁。ただし、日蓮宗側はこの映画を「宗門の為め、大聖人の為めに実に尊い御奉公」と評価しつつも、「更に偉大な、更に完全な、大映画を造らなければならぬ。（中略）それは宣伝の為めであつてはならぬ、利用の為めであつてはならぬ。それは実に、大聖人の尊き、生きた歴史の最高芸術品でなければならぬ。」と日蓮門下に「完全な」映画を制作するよう呼びかけている。さらに、「常に「利用」といふ頭で制作された「筋」といふことにのみ没頭して造られた非芸術的悪品」は却って宣伝や布教の上では効果がないと指摘し、日蓮の一代記に限らない映画であり、説明者も弁士も不要でフィルムの展開だけで「観客の血を涌かし、肉を踊らす大映画」の制作が必要だと訴えている。「映画利用の宣伝と制作」『日蓮主義』（日蓮宗宗務院、第3巻3号、1929年）、111～112頁。

49　妹尾前掲、154頁。

50　日親の生涯や日親信仰については次の先行研究を参照した。北村敏「日蓮・日親伝説と民俗信仰」（宮田登・坂本要編『俗信と仏教』（仏教民俗学大系8）名著出版、1992年、375～400頁）、寺尾英智・北村行遠編『反骨の導師日親・日奥』（吉川弘文館、2004年）、中尾堯『日親――その行動と思想』（評論社、1971年）、『日親と［日蓮信仰］』（週刊朝日百科仏教を歩く24）、朝日新聞社、2004年）。

51　「鍋かぶり日親映画封切会の大盛況」（『統一』第330号、1922年7月、39頁）および「鍋かぶり日親映画」（『法華』第9巻7号、1922年7月、91頁）を参照。

52　「御依頼状」、立正活映資料46357-07。

53　東京での封切りについての感想記は、「『なべかぶり日親』を観て――宣伝フィルム――」（『若人』第３巻９号、1922年８月、116－117頁、立正活映資料46357-19）にあるが、観客数は記されていない。ちなみに、『朝日新聞』（1922年７月25日、夕刊）や『天業民報』（1922年７月25日～27日）に『鍋かぶり日親』封切りの広告がある。

54　前掲「鍋かぶり日親映画封切会の大盛況」および「鍋かぶり日親映画」を参照。

55　「天業民報京都より（大正十一年六月）」（妹尾前掲）。

56　前掲「鍋かぶり日親映画封切会の大盛況」。

57　「日活会社の宣伝成績」（『統一』第340号、1923年５月）、54頁。なお、1923年３月17日付の『天業民報』（第755号）、３頁にも同様の報告が掲載されている。

58　「日蓮主義宣伝活動写真会社成績」（『法華』第10巻８号、1923年８月）、101頁。ちなみに同報告では、1924年５月まで日親の映画のフィルムと映写機を持って巡回映写を行い、６月からは新映画の『楞厳丸』を上映すると予告している。

59　例えば、東京で上映された際の感想については、1922年７月30日付の『天業民報』が参考になる。「先づ無難な作といつてよからう」としつつも、「ただ変化に富んだ面白き事件の連続それを、要領丈バチバチと撮った」と低評価。また、「説明の不徹底」が理由で観るひとびとに「感激を与へるといふことに失敗している」と問題点を挙げ、簡単な筋書きの印刷したものを入場者に渡しておく必要があると指摘。とりわけ日親を演じている「役者の体格容貌が甚だ不味い」、「剛健な、そして将軍をも威圧した厳然たる威容は全然ゼロであった」と批判（せいかう「宣伝フィルム『なべかぶり日親』を観て」『天業民報』第567号、３頁）。同じ機関紙『天業民報』とはいえ、京都での盛り上がりとは対照的な東京での評価がうかがえる。

60　『楞厳丸』の製作は1923年１月に着手し、1924年６月までにはおおよそ完成し、封切りは同年７月５－６日の両日に京都市公会堂で開催され、その後、全国の巡回映写をする予定といった情報は、以下を参照のこと。「日蓮主義の新しいフィルム」（『統一』第352号、1924年７月）、48頁。また、『加藤清正公御一代記』については、1927年６月17日付の『読売新聞』（朝刊）に広告があり、同年６月18日から27日まで、10日間にわたって午後１時と７時の二回ずつ、浅草の統一閣で上映会を開き、会費は１名70銭と掲載されている。また、「目下巡写中」で「各地至処大人気」という情報もある（「活動写真撮影脚本募集」『統一』第398号、1928年５月）が、詳細についての調査と考察は今後の課題とする。

61　前掲「活動写真撮影脚本募集」。なお、同じ広告は、『統一』第400号（1928年７月発行）および第401号（1928年８月発行）他、日蓮宗宗務院が発行していた『日蓮主義』（第２巻４号、1928年４月）にも掲載されている。

62　「立正活映公募の聖伝映画脚本審査結果発表」（『統一』第410号、1929年５月）、47頁、「立正活映の聖伝脚本審査発表」（『日蓮主義』第３巻６号、1929年６月）、92頁。

63　『本化御門下各教団緇素大会速記録』（全２冊、立正活映資料46355-01～02）では、日蓮映画に関する日蓮宗各派の僧侶の意見が記録されている。

64 「日蓮聖人御正伝映画完成近し」(『日蓮主義』第 8 巻 6 号、1934年 6 月)、88頁。
65 『日本演芸関西通信』第17号、1935年 3 月、立正活映資料46358-09。
66 同上。
67 「誓願書」、立正活映資料46358-26。
68 「日蓮聖人映画製作に関する末状」、立正活映資料46358-08。